

令和2年度 入学試験問題

国語

九州国際大学付属中学校

【注意事項】

- 1 開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。
- 3 試験時間は50分です。
- 4 解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。
- 6 答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

受験 番号				氏 名	
----------	--	--	--	--------	--

□ 次の記事をよく読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。なお、まだ習っていない漢字については、読みがなを付けたリ、ひらがなで表記したりしています。

電車の中の行動で最近気になっているのが、他人をかきわけて進む行動。「どつく」と表現しても大げさではないくらい、他人をモノのように扱う^{あつか}人がいる。特にドア付近に人が固まっているとき、発車のベルが鳴りだしてから席を立てて急いで降りようとする人に、
① こうした行動が観察される。

② 由緒正しき日本人像にあてはまる礼儀正しい行動は、手のひらを③タテにして片手をつき出し、上下にゆすりながら「すみません」と言いつつ、まわりの人がどいてくれたらさらに「すみませんねえ」と感謝しながら、少しずつ進む④作法だろう。

これに対し、少なくとも私が非常識だと判断する現代日本人的行動は、⑤無言で、ときに人の体や服の一部をわしづかみにして左右に振り分けながら、ひたすら中央突破する振る舞いである。

③ 他人をどついていく人は、なぜそうするのだろうか。

古き良き日本人の道徳が崩壊してしまったからなのだろうか。

その昔、日本人には、礼を重んじ、お互いが気持ちよく暮らすためのマナーが身についていたという。これらは「④江戸しぐさ」と呼ばれ、社会人として習得すべき心得として⑤ジュウシされていたらしい。

雨の日に狭い通路ですれちがうときには、お互いに自分の傘を傾けて、相手を通りやすいようにする「傘かしげ」。長いすなどに座っているときに、後から人がやってきたら腰をうかす「こぶし浮かせ」。足を踏まれたら、踏んだ方だけではなく踏まれた方も、「よけられなかった私がうかつでした」と、ウカツさを謝る「うかつあやまり」など。

江戸しぐさの語り部である越川禮子氏の著書には、イキでカッコいい日本人の⑥心得が紹介されている。ちなみに越川氏によれば、「イキ」とは本来、「粋」のことを指すのではなく、生き生きしているという意味での「生き」を指すそうだ。

江戸しぐさは、ぎすぎすしがちな都市生活を気持ち良く過ごすためのマナーだった。江戸しぐさを身につけた大人は尊敬され、子どもたちもそんな大人を見習って育った。テレビや雑誌などない時代である。理想の父親を有名人にたとえることもない。「おとなになったら、こういう人になりたい」という目標としての人物像は、
* だったに違いない。

では、江戸の子どもたちは、どのようにして江戸しぐさを学んだのだろうか。

越川氏によれば、江戸に暮らす六十万人の町民の八〇%が商人だったそうで、江戸しぐさは商売繁盛のために、彼らが顧客サービス
の向上を考えて発展させた「商人道」だったそうだ。商人たちは、跡継ぎを育てるために、「講」と呼ばれる地域の学校のようなもの

を自分たちでつくり、子息に伝えていった。今風に言えば、商工会議所のような団体が、ビジネススキルやソーシャルスキルの研修会を会員の子どもたちに提供していたようなものだろう。

江戸しぐさは文章化こそされなかったが、一つひとつに名前がつけられて体系化されていた。子どもの頃から、まわりには手本となる大人が存在し、なぜそのように振る舞わなくてはならないかが説明された。練習する機会もあった。「他の人の迷惑を考えましょう」というような抽象的で精神的なお題目ではなく、「⑤すれちがうときは肩を引きましよう」という具体的に行動的な約束事としてまとめられていたことも、江戸しぐさの普及に役立ったに違いない。

(島宗理『人は、なぜ約束の時間に遅れるのか』より)

問一 ㉔㉕のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 ①「こうした行動」とありますが、具体的にはどのような行動だと筆者は言っていますか。本文中から十二字で抜き出しなさい。

問三 ②「由緒正しき日本人像」を次の文のように表したとき、に当てはまる部分を本文中から三十字で探し、はじめと終わりの五字ずつを抜き出しなさい。

いる日本人。

問四 ③「他人をどついていく人」とありますが、このような人は何が足りない人だと考えますか。次のに当てはまる適切な言葉を、五字以内で考えて答えなさい。ただし、本文の中で使われていない言葉で答えること。

が足りない人。

問五 * に入る人物として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 殿さまやお役人さま イ 歴史に名を残す偉人たち

ウ ご先祖さま エ 家族や近所の人たち

問六

—— ④ 「江戸しぐさ」についての説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 江戸しぐさを身につけていなければ、商人の世界では跡継ぎになることは許されなかった。

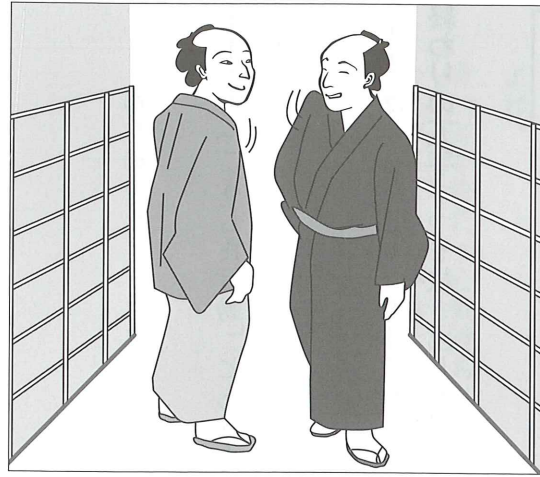
イ 江戸しぐさがしつかり身についた大人は尊敬され、そんな大人を見て子どもたちは育っていった。

ウ 江戸しぐさの中には名前がついているものもあり、名前があるのでその動きを理解することができた。

エ 江戸しぐさは、「講」という学校のような場所で教えられていたので、教科書のようなものが作られていた。

問七

—— ⑤ 「すれちがうときは肩を引きましょう」とありますが、これは「肩引き」という江戸しぐさです。この江戸しぐさはどのような意味がある行動でしょうか。考えて答えなさい。



かたひ
肩引き

人とすれ違うとき
ひだりかた ろかた
左肩を路肩に寄せ
て歩くこと。

二

次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。本文には一部省略があります。また、字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。なお、まだ習っていない漢字については、読みがなを付けたり、ひらがなで表記したりしています。

小学一年生の千秋は、母と二人でポプラ荘^{そう}というアパートに住んでいる。その住人は、千秋たちのほかは衣装会社に勤める佐々木さんと、タクシー運転手の西岡さんだけ。アパートの大家さん（おばあさん）は千秋に、「私は亡くなった人に手紙を届けるお役目がある」というふしぎな話をし、「いろんな人から預かった手紙でダンスの引き出しがいっぱいになったら死ぬ」と告げていた。千秋も、亡くなった父親あての手紙をおばあさんに毎日預けていた。

①ある日のこと。庭で、私はおばあさんを待っていた。目医者にでも行ったのだろうか。学校から帰ってきて、もうずいぶん時間がたっていた。

前夜の北風で、ポプラはほとんど丸裸^{まるはだか}になっている。私は黄色い落ち葉を掃き集めながら、「全部葉っぱがなくなったら、たき火もできなくなるのだ」と考えていた。（中略）

私は葉っぱを山盛りにすると、もちろん子供がひとりで火をつけることなどできないのはわかっているから、しゃがみこんでおばあさんを待った。風はもうやんでいたけれど、寒い、灰色の日だった。折り曲げた足から①感覚がなくなつて、からだの熱が、低く、よどんでいくのがわかる。

おーい、おーい……

遠いところから呼ぶような声^{こゑ}がして、私は目を開けた。いつの間にか、しゃがみこんだまま②ネムっていたのだ。むき出しの膝小僧^{ひざこぞう}の上に、押し当てていた前歯の跡^{あと}がついて、足が②しびれていた。あたりはだいぶ暗くなっている。

「寝てたの？」

はつと顔をあげると、目の前に巨大なうさぎの頭があつた。うさぎはジーンズをはいて、呆然^{ぼうぜん}としゃがんでいる私にむかつて手を振った。

「佐々木さん？」

「あ、すぐにわかつちやうわけね」

かぶつていたうさぎの頭を持ち上げて、佐々木さんが現れた。うさぎの頭と一緒に、髪が一瞬^{いっしゆん}ふわっと③逆立って、「佐々木さんて美人だ」と、私は思った。

「これね、うちの会社で作ったのよ。もういらないうつて言うから」

佐々木さんは、巨大なうさぎの頭部を私につき出した。

「あんたにあげようと思って」

私は足のしびれによりろしながら立ち上がり、うさぎの頭をかぶってみた。

「なんにも見えない。くさい」

私は真つ暗ななかでもがいた。

「やっぱだめか。目の位置が大人用だからね」

佐々木さんは、私の頭からうさぎを取りのけてくれると、「今度は子供用のを持ってきてあげるよ」と言った。別にうさぎになりた
いという◎ヘンシン願望はなかったけれど、ありがとう、と私はお礼を言った。

「婆あは？」佐々木さんは時々、おばあさんのことをそんなふうと呼ぶ。

「いない」

「どこ行ったのかな」

「目医者さんじゃないかと思う」（中略）

一年でいちばん日の短い季節特有の、墨でも流したような暗さが、あたりを覆いはじめている。

「遅いよねえ」

佐々木さんが、ひとり言のようにつぶやく。「お芋、買っているのに……」

私はAにわかに不安になった。目医者に行ったにしては遅すぎたし、おばあさんがこんな時間まで留守にすることは、今まで一度も
なかったのだ。②もしかしたら……そうだ、こんな遅くまでおばあさんが帰ってこないというのは、③もしかしたら……

「佐々木さん、猫って死ぬ時、どっか行っちゃうって言ったよね」

「うん」

「おばあさんを捜さなくちゃ」

「ええ？」

「死ぬって言ってたの、引き出しがいっぱいになったら」

「引き出し？ なにそれ」

なんて迂闊だったんだろう。私は自分で毎日手紙を運んでいるが、引き出しがいっぱいになる日がこんなに早く来ようとは、まる
で考えていなかったのだ。（中略）

「どうしましたあ」

半纏をはおった西岡さんが、窓から身を乗り出す。

「この子、おばあさんが帰ってこないって心配してるの」

おばあさんのことより私に手を焼いている、という佐々木さんの口調に、私はいらいらした。

「おばあさん、死んでるかも知れない」

背中から部屋の明かりを浴びているので顔は見えなかったが、私がそう言うと、西岡さんはぎょつとしたようだった。それから外階段を降りる音がして、例の左側だけ長くした髪を、頭の薄くなったところになでつけながら庭にやってくると、

「ち、千秋ちゃん、どして死んでるなんて思うの」

西岡さんは、いつもの早口で私に訊いた。私は手紙のことを言ってしまいたくなかったけれど、たくさんおばあさんに手紙を預けているのがなんだか疚しいので、「帰ってこないから」とだけ、ぱつりと言った。その瞬間、「自分は嘘つきになってしまった」という思いでいっぱいになって、④驚いたことに、私の目からぼろぼろと転げるように涙が落ちた。

涙の効果は抜群で、西岡さんは泣いている私が申し訳なくなるほどどうろたえて、**3**足踏みしてしまう。佐々木さんはため息をついて、うさぎの頭を私にかぶせた。

「とにかく、とにかくおばあさんを捜しに行ってみましょう。こ、こ、こういうことは、子供の勘が当たるってよく言っし」
暗くてくさいうさぎの頭のなかで、私は西岡さんの裏返った声にB戦慄した。そうか、当たるのか！

「それに、もしかしたら帰り道がわからなくなっちゃってる、なんてことも……」

「まさか」佐々木さんの声は、あの婆あが、と続けたような調子だ。（中略）

目医者は診察時間が終わって、何度ベルを押しても、誰も出てこなかった。私はすっかり暗くなった道を、どこかでおばあさんが倒れていたりはいまいかと、あたりを見回しながら歩いた。

「大丈夫だったら。おばあさん、きつと帰ってるよ」（中略）

「おばあさん、ほんとに帰ってると思う？」

私ともう一度訊くと、⑤佐々木さんは何も言わずに、私の手をとってぎゅつと握ってくれた。

ポプラ荘に戻ると、門柱のところで母が心配気に立っていた。母は、私が佐々木さんと一緒なので、ちよつと驚いたようだった。

「おかあさん、おばあさんは？ まだ帰ってない？」

「うん。どうかした？」

がっかりしている私のかわりに、佐々木さんが事情を説明してくれた。

「私がちよつといけなかったのね。千秋ちゃんに、猫は死ぬ時なくなる、なんて教えたから、不安になっちゃったみたいで」

母は少し気づかわしげに私を見たが、すぐに、

「いえ、もう七時過ぎてますし、心配になるのも無理ないわ」

と、しょぼくれている私の背中を軽く叩いた。(中略)

その時、川沿いの道から、黒い人影がゆらりとやってきた。

「おばあさん？」

月の光の④カゲンで、おばあさんの姿がぼうつと浮き上がる。

「おや、皆さんおそろいで」

おばあさんの声が、こちらに届く。⑥けれど私はなんだか戸惑って、動けなくなっていました。

おばあさんは、和装の喪服姿だった。普段は着物を着ないおばあさんだから、それはめずらしいことだったけれど、私が注目していたのはそんなことではなく、おばあさんの顔だった。以前、おばあさんに初めて会った時、おばあさんが⑥悪者のポパイのような顔になってしまったのは何かへんな薬を飲んだからにちがいないと思ったが、今度こそおばあさんは怪しげな薬を飲んだのだ、と私は確信した。

—アメリカのアニメーションの主人公の名前

ちんくしゃのはずのおばあさんの顔は、ずいぶんと長くなっているのである。よく見ると、長くなっているのは顔の下半分で、頬が膨らみしわも伸びて、若くなった感じがしないでもない。(そうか、おばあさんは若返りの薬を飲んだのだ……)けれど、いかにも悪知恵のまわりそうな、いつもの生き生きとした感じはなかった。声さえいくぶん違って、なんだかくぐもってきこえるのだ。

「ああ、疲れた。お通夜なんか行くもんじやないね。ほら、ちよつとこれ……」

おばあさんは、黒いハンドバッグを開けて鍵を出すと、私のほうに差し出す。私は恐る恐る近づき、鍵を手にする。その間、私の目は、おばあさんの顔に釘付けだった。

「何をぼうつとしてるんだい。開けておくれよ」

おばあさんがそう言い、次の瞬間、私は叫んだ。

「おばあさん……歯がはえたー」

おばあさんは、いささかむっとした様子で黙り込んだ。それからおもむろに、
「そりや歯ぐらい入れるさ、よそゆきだもの」

と言って、口をぎゅっと閉じた。そのかわり、鼻の穴は全開になっている。

問一 ㉠㉡のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 ①「ある日のこと」とありますが、

- (1) 季節はいつですか。春・夏・秋・冬のいずれかで答えなさい。
(2) その季節を最もわかりやすく説明している表現を、本文中から十三字で抜き出しなさい。

問三 1 3 にあてはまる言葉を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そわそわと イ だんだんと ウ じんじんと エ そろそろと オ するすると

問四 ②、③「もしかしたら……」とありますが、「……」に入るのはどんな言葉ですか。本文中から十字で抜き出しなさい。

問五 A「にわかに」、B「戦慄した」の意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「にわかに」

B「戦慄した」

ア なんとなく

ア なつとくした

イ しだいに

イ いらいらした

ウ 急に

ウ わくわくした

エ うそみたいに

エ おそろしくなった

問六 ④「驚いたことに、私の目からぽろぽろと転げるように涙が落ちた」とありますが、この涙の理由を、佐々木さんはどう考えていますか。本文中の言葉を使って考えて答えなさい。

問七 ⑤「佐々木さんは何も言わずに、私の手をぎゅっと握ってくれた」とありますが、佐々木さんのこのときの気持ちを言葉にすると、どんなセリフになると考えますか。佐々木さんのセリフを考えて答えなさい。

問八

⑥ 「けれど私はなんだか戸惑^{とまど}って、動けなくなりました」とありますが、この場面についてAさん、Bくん、Cさんが話し合っています。本文の内容をよく読んで、 にあてはまる言葉を、あとに示す条件にしたがって書きなさい。「あ・え・お」に関しては本文中から指定された字数で抜き出しなさい。「い」と「う」に関しては、指定された字数で自分で考えて書きなさい。

Aさん 千秋は戸惑っただけでなく、動けなくなっている。どんな気持ちでいるんだろう。

Bくん おばあさんに あ(四字) 近づいたとあるから、無事がわかった喜びより、むしろこわがっているように感じるね。

Aさん 暗やみの中から い(一字) 色の喪服姿であらわれたら、やっぱりおどろくだろうし、いつもとちがう服装に加えて、顔の様子までちがっていたから戸惑ったんだろうな。この日は う(三字) を入っていたから顔がちがって見えただよね。

Cさん きつと不安だった気持ちと、いつもとちがうおばあさんの姿と、夜の暗さがあわさって、なんだかふしぎなものを見るような気持ちになつて動けなくなつたのかもしれない。

Bくん それにしても う を入れたおばあさんに え(五字) と言ったり、顔のしわが伸びたのを お(九字) せいだと考えたり、千秋はともかわいらしいね。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 漢字の読みには音と訓があります。次の熟語の読みは の中のどの組み合わせになっていますか。ア、イ、エの記号で答えなさい。

- ① 手配 ② 磁石 ③ 潮風

ア	音と音
イ	音と訓
エ	訓と音
ウ	訓と訓

問二 次の慣用句の にあてはまる動物の名前を、あとの意味を手がかりに答えなさい。なお、ひらがなでもかまいません。

- ① をかぶる
〈本性をかくし、おとなしそうに見せかける〉

- ② が合う
〈相手と気持ちがしっくり合う〉

- ③ の涙
〈非常に少ないこと〉

問三 次の に漢字二字を入れると四字熟語が完成します。それぞれにあてはまるものを後の語群から選び、漢字に直して答えなさい。

- ① 自足 ② 投合 ③ 一進 ④ 私利

【語群】

たいき しよく いっちよう いき いったい じきゆう